

獲る定置網から留め置く定置網へ (緩やかな移行への提案) 1/2

◇空振り (2016/04/16 北陸中日新聞より 県水産総合センター調べ)

県内の定置網による「寒ブリ」(一五年十一月～一六年三月)の漁獲は例年の2割にも届かず、豊漁の5年前に比べわずか5%との極めて寂しい結果となった。国の研究機関の調査結果でも減っているわけではなく、むしろ水産資源として『十分である』との認識。

◇魚介類の消費量ピークの3割減 水産白書(2016/05/18 北陸中日新聞より)

二〇一五年度版の水産白書によると十四年度の国民一人当たりの年間水産物消費量は二七・三*とピークの〇一年度に比べ三割減となり、・・・いわゆる「魚離れ」が顕著となり、特に若い世代ほどその「魚離れ」が進んでいるとのこと、また、新興国を中心にその消費が拡大し、「輸出市場に販路を求めることは需要拡大の重要な選択肢」と強調。国内需要の回帰に向けてのアクションより、輸出拡大の推進・促進と受け止められる。

◇養殖ブリの海外展開とその問題点(NHK総合番組より)

NHK総合番組(日付・番組名失念しました)で近畿大学水産学部教授・株式会社食縁代表取締役有路昌彦さんを中心とした養殖ブリの海外展開についての放送において、有路さんは海外販売成功の秘訣として「日本国内での販売実績が豊富にあること」を実感として強調され、その理由として「相手側に日本で売れないものを押し付けられたと認識され、購入拒絶や大幅なディスカウントを要求される」と指摘されていた。

◇定置網漁関係者 国への要望確認(2016/06/08 北陸中日新聞より)

日本海沿岸一府四県(京都、福井、石川、富山、新潟)の定置網漁業者による漁業振興大会が開かれた。特にブリ漁などは巻き網漁業者との共存が課題で国の仲介で二〇〇七年から双方が意見交換を重ねている。(以上抜粋)水産資源として『十分である』はずであるにも関わらず、第三者の当方は何を議論するのがとても疑問である。

◇漁獲における現状分析とそのあるべき方向性

- ・その手段が何れにしても、漁獲は需要に基づいた生産活動ではない。(獲れた時が旬)
- ・需要が漁獲に影響される要素は現状極めて少ない。(食べたい時が旬)
- ・従って、漁獲と消費者の実需要との相関関係はなく、それぞれ独立事象である。
- ・鮮魚介類の漁獲や養殖を水産物生産と読み替えると、需要に基づかない生産は、生産過剰や機会損失(需要があるのにモノがない)を生み出すこととなる。生産過剰のその行く末は廃棄(在庫し辛い)であり、機会損失はダイレクトに利益の損失である。
- ・漁獲の予想は極めて難しいし、仮に出来たとしても、需要とは無く関係ない。
- ・需要については概ね安定している。(残念ながら微減の状況が続いているが)